広報あしや

'75 No.19

小学校３年生～中学校３年生用

毎学期発行

山手中学校　１年生　三宅真由美さんの作品

あそび・あそび場

■ アンケートの集計（2）

■ 座談会　私たちにだいじなもの

発行／昭和50年３月13日　発行所／芦屋市役所　発行人／芦屋市長　編集／企画部公聴広報課

あそび　あそび場

私たちにだいじなもの

今回は、「あそび・あそび場アンケート」の集計結果と毎日の生活をふりかえりながら、山手中学校の八人のお友だちに〝あそび〟について話しあっていただきました。

（座談会は、三月六日に行ないました。）

中学生になって

司会　小学生のころと中学生の今とでは、〝あそび〟はちがってきたと思いますか。

三宅博　やはり変ったと思います。小学校のころは、友だちの家へいくことが多かったけれど、今は学校から帰る時間が遅くなったので、外へ出ることがなくなった。小学校のころとくらべて、やはり室内での〝あそび〟が多くなったと思います。

大内　小学校のころにくらべて校区が広くなったから、家へ帰ってもクラスの友だちが近所にはいないし、小学校のころの友だちとは、連絡がつかなかったりするから、あまり外で遊ぶことがなくなってきました。

糸井　小学校のころは、学校ではGパンでドッヂボールもできたけれど、中学になると制服になったからそんなことはやりにくいし、なんだか遊ぶ範囲がせまくなった感じ。家では、刺しゅうとか、テープレコーダで音楽を聞いたり…小学校のころとあまり変わらない。

三宅真　学校では、昼休みなどにしても休むためにあるので、遊ぶためにあるのじゃないと先生などから、あばれたりするのをとめられたこともあるから…だから女の子は教室でおしゃべりしたり、男の子は教室の中をうろうろしたりするくらいが、

出席のお友だち

——山手中学校——

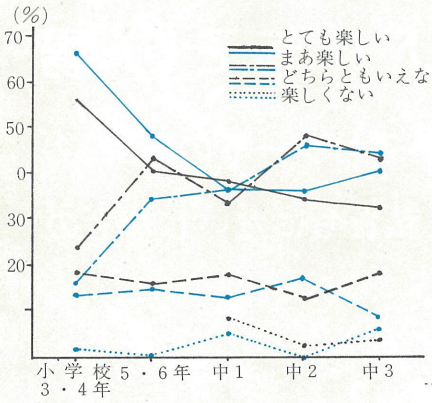
1年生	2年生
三宅博史くん	宮本真治くん
大内邦生くん	加藤治郎くん
糸井美佳さん	杉山道夫くん
三宅真由美さん	野村万美さん

■あそび・あそび場アンケートの集計（2）

昨年秋に行ないました「あそび・あそび場アンケート」の結果を、前号（「広報あしや」第十八号）にひきつづきご紹介しましょう。

最初に、「あなたは、遊んでいるとき楽しいですか」という質問では学年が進むにつれ（特に男子）、「とても楽しい」が少なくなっています。（左のグラフ）

Q1　あなたは遊んでいるとき楽しいですか。



学校での〝あそび〟みたい。

野村　学校から帰ると五時ぐらいになるし、わざわざ外へ出かけていって、三十分くらい遊んですぐ帰ることを考えたら、出かける気にならない。　今は学校が終わると、まっすぐ帰ってテレビを見たり、ラジオを聞いたりしていることが多い。

杉山　小学校のころは、授業のあと校庭を走りまわっていたけれど、ぼくの場合、中学になると〝部活動〟がそれに代わっていますね。でも、ぼくは小学生のころから、あまり外へ出て遊ぶことはしたくなかった。

加藤　だいたいみんなといっしょで、中学になってからあまり遊ばなくなった。それに小学校のときには授業が終わったら解放感があったけど、中学になったらそれがなくなってきた感じ。勉強だけでなく、クラブとかいろいろとやることが多いでしょう。学校では昼休みに、校庭があいていたら野球なんかする。あいていなかったら、自分たちでゲームなんかを紙に書いて遊んだりする。

宮本　小学校のときは公園で遊んだけれど、小さいこどもがくるとあぶないから遊べなかった。中学生になって外へ出ないし、友だちが家にきてくれるのはうれしいけど、何か気をつかってしまうから、ひとりで遊んでいたほうが気が楽みたい。

三宅博くん

大石くん

糸井さん

三宅真さん

こんな遊び場を

司会　みんなは、どんな〝あそび場〟があれば、外で遊ぶ気になりますか。

大内　ぼくは、芝生を張りつめた広いところ。

三宅博　青少年野外活動センターなんかいいんじゃないかと思う。キャンプとかハイキングにいくと、のびのびする。

糸井　私は室内で遊ぶほうがいい。だから、本のたくさんある図書館なんか好きですね。ほかには、自然のあるところ。芝生があって、菩提樹なんかがしげっているところ。

三宅真　中学になると、遊びっていうよりスポーツが多くなるから、予約しなくても、だれでもが気軽に入れるスポーツセンターなんかがほしい。

野村　青少年センターは遠いから、近くで自由に入れる施設がほしい。そこには、テニスコートとかいろんな設備があって、広い草原みたいなものもあるといったところをつくってもらいたい。

杉山　ぼくは岩園幼稚園や宮川小学校の近くだから、遅くまで校庭な

つぎに「あなたは遊んでいるとき、何か思いながら遊んでいますか」という質問では、「何か思う」30～40％、「何も思わない」50～60％となっています。これは、各学年でそれほど大きな違いは見られませんが、学年の進むほど「何も思わない」が少しずつふえ、低学年ほど「何か思い」ながら遊んでいることがわかります。

また、この「何か思う」の内容は勉強のことであったり、友だちのことであったり、あそび場・時間のことなどさまざまですが、おおまかに言えばだいたい次のような特色が見られます。

まず「勉強」ですが、これはどの学年もかなりの人が、遊んでいても気にしているようです。「お手伝い」を気にすると答えたのは、各学年とも少人数の人だけでしたが、小学生のうちは男女いずれにも見られますが、中学生になると女子にだけ見られるようになっています。また、「あそぶ時間」が足りないというのは、各学年共通の悩みのようですが、小・中学生を通じて男子は、女子にくらべてどちらかといえば「場」の足りなさを強く感じています。そして、友だちの数については、「いまのままでいい」（小学生）、「少人数の友だちと深くつきあいたい」（中学生）などの意見もありましたが、全体と

どを開放してくれたら、外でも遊ぶ気になるかもしれない。

加藤　芦屋には遊ぶところは、わりにあると思うんです。でも、ぼくの近くのちびっ子広場には、スベリ台がまん中にあるんですよね。小さい子のあそび場って感じで、ボール遊びもできないし、ぼくらにはむいていない気がするんです。それに、市民体育館も自由には使えないし、あそび場がないでしょう。

大内　遊び場があっても、〝野球をしないでください〟とか〝ボール遊びをしないでください〟とかの看板が多くて、がっかりします。

宮本　青少年センターは遠いから公園が近くにあるといいんだけれど、そこではボール遊びができないから、もっと山のほうにでもいいから、気がねしなくて遊べるところをつくってほしい。

解放感がない

司会　さきほど、中学生になってからは〝解放感〟みたいなものがなくなったというご意見がありましたが、みなさんはどう思いますか。

三宅真　もうすぐ受験があるでしょう。だからそれで束縛されてしまう。

司会　でも、三宅さんはまだ中学一年生なんでしょう。

三宅真　でも、兵庫方式だからいつも、テストのことが気になるんです。先生からも、テストのことなどいつもいつも聞かされていると、やらないといけない気になるし、自分でもみんなに負けたくない気持ちもある。中学になると、宿題はもちろん、予習・復習もやらないといけないし、何となく勉強しなければいけないふんい気みたいなものがあり、いつも解放感がない感じ。

杉山　だけど、中学一年生のうちは、まだ、遊ぶべきだと思いますね。

三宅博　そんなことをいっても、小学校六年のころから試験、試験で大さわぎですよ。

野村　二年になって、一年のころはまだ遊ぶ時間が少しはあったように思うけど、二年生も後半になって、三年生の卒業前になると、部活動や生徒会もみんな二年生が中心にならないといけないから、ますます時間がなくなる。それを思えば、二年生のうちに遊んでいたほうが、やはり私もいいと思う。

大内　〝解放感〟のことだけど、小学校のころとちがって、中学校では毎時間先生が変わるでしょ。だから、どの時間も緊張しないといけないし、休み時間でも気が安まらない。

三宅博　いちばん大きな理由は、学校から帰る時間が遅くなったこと。このごろでは、宿題とか予習・復習をやらなければならないので、遊ぶ友だちもいない。いつも時間に追われているようで解放感がないんじゃないかな。

司会　あそびは、なぜ必要だと思いますか。

三宅真　あそびは〝気持ちの勉強〟だと思う。遊んでいる中で、学ぶことがたくさんある。今のように勉強ばかりでは、頭も痛くなるし、気持ちもまいってしまう。だから〝あそび〟はとても大切なものだと思う。

〝あそび〟は人間性を深める

司会　今、どんな〝あそび〟をしたいですか。

三宅博　広いところでかけまわりたい。

大内　勉強、勉強でつめこまれた人は、将来どんな人になるのかと思う。性格のゆがみをなくすためにも〝あそび〟は大切なものじゃあないかな。

しては「もっとたくさんの友だちとあそびたい」が圧倒的でした。さらにどの学年も「何かおもしろいことがないかな」と思いながら遊んでいるようですが、中学生になると「新しいゲーム・あそび」を考えながら遊ぼうとするひとが少なくなっています。

「あなたのあそび時間はだんだん少なくなってきていると思いますか」に「少なくなってきている」と答えたのは小学生で平均57％、中学生で平均59％です。その原因として、小・中学校とも多いのは「勉強時間が多くなったため」で、あとは、グラフのような順になっています。

なお、「その他」の中には、クラブ活動があるから、学校の終わる時間が遅くなったからなどが目立ちました。

Q2　あなたは、あなたのあそび時間が少なくなった原因は何だと思いますか。

また、そんな人はいてほしくないですね。今やりたいことは、小学校のころもやっていたけど、かけまわったり、体をぶつけあったりしたい。

野村　私は友だちを大切にするべきだと思うんですね。私は、勉強していて友だちがつくれるとは思わないんですよ。いっしょに遊んでいてこそ、みんなの〝和〟ができると思うからね。〝あそび〟って、すごく大切なものだと思う。それと、今やりたいことは、広いところで友だちと思いきり遊びたいってことです。

加藤　集団で遊ぶことは、大切だと思う。おたがいの理解や交流を深めることが、いちばんだいじだと思う。みんなでハイキングや、あそびにいったりするのもいいし。

宮本　ぼくは、一年生の夏休みに友だちと旅行にいったんです。今までは阪神間の中しか知らなかったけど、この旅行で遠くの広いところへ友だちと行ったことで、自分にも自信がついたし、友だちとも親しくなったのはとてもよかった。こういった広い意味での〝あそび〟も必要じゃないかと思う。何かプラスになることが、たくさんあると思いますね。

杉山　勉強にしても自分の好きなことをするのが〝あそび〟だと思う。それをしていれば、あとで後悔することもないし。それと、今、ぼくがやりたいことは陶芸です。

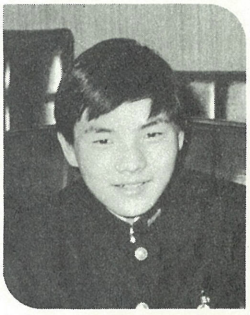
糸井　〝あそび〟っていうのは、遊びなさいといわれて遊ぶものじゃなく自然に遊んでしまうものでしょ。自然なことは人間に必要だってことだと思う。友だちと遊ぶことによって協調性とか、人間として大切なことを遊びから身をもって感じることができる。

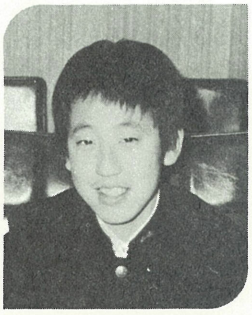
大内　アンケート調査の結果では、テレビを見たりするのが多いですね。だけど、テレビは見すぎると目が悪くなるし、ひとりで閉じこもることにもつながる。外で遊んでいたら、友だちのすることなんかを見て〝あの友だちはうまいなあ。ぼくも教えてもらおう〟というつながりもできたり、人間どおしのつながりを深めることができると思う。

三宅真　私がいちばんいいたいことは、今はやりたいことをやれる時間もないのが現実だけど、この矛盾をみんなが考えたら、少しでもマシになっていくと思うことなんです。

杉山くん

野村さん

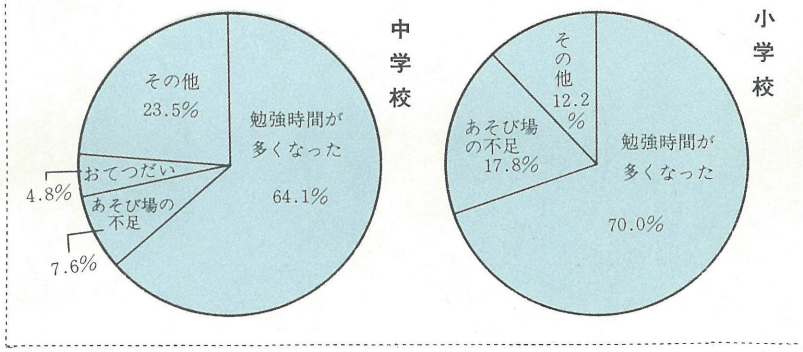

宮本くん


加藤くん

自主性を尊重して！

司会　おとなや社会に対して何か注文することはありませんか。また、将来どんなことをやりたいと思っているか教えてください。

右のグラフと次頁グラフとを見くらべてください。「勉強」のために遊ぶ時間が少なくなったと答えた人はずいぶん多いですが、「どうしたらいいと思いますか」という質問には、「勉強時間をへらしたい」の小学生と、「どうしようとも思わない」の中学生がそれぞれトップになっています。



宮本　いまのおとなたちは、せっかくぼくらが考えようとしているのに、おとなの考えだけで決めつけて、ぼくたちがやりたいこともやらせてくれないことが多い。また、先生自身もやりたいことがあっても、それをはばむものがあってできないとかいうことが多いんです。将来は先生になりたい。

加藤　親とか先生とかは、ぼくたちを補助するだけして、直接かかわってもらわないほうがいい。そのほうがぼくらにはプラスになると思う。将来の希望は、ぼくは写真をとることが好きだからカメラマン。通訳もおもしろそうだからやってみたい。

杉山　ぼくも学校のことになるけど、もっと先生がたは生徒を信用してもらいたい。生徒会のことでも、勉強のことでも、必要なときには、みんな自覚があるんだから、精神的に圧迫しないでほしいと思います。将来は、文章を書いたりしたい。

野村　もう少しおおめに見てほしいですね。それから、学年会主催の行事なんかは、もうちょっと生徒の意見をとり入れてほしい。将来ですが、私は看護婦になりたい。

三宅真　私たちはまだ十三才だしわからないこともたくさんあるので、気軽に相談できるようなおとなであってほしいと思いますね。それと、将来は日本文学について調べたり研究したりしたい。

糸井　今、国会で教科書の内容を浅くせまくしたらどうかっていっているけど、私もそれに賛成です。人生は長いし、何も九年間だけでつめこまなくてもいいと思う。それに今の教科書は一冊を消化するだけで精いっぱい。将来はね。これとは関係ないけど、正倉院にある〝正倉院布（きれ）〟の分類をしたいんです。

大内　自分かってな考えだとは思うけど、好きな教科の授業だけを受けられるようになればいいと思う。それから、このごろ自然がなくなってきているので、ビルを建てるよりも、一から都市の計画をやり直し、もっと公園や広場や緑をふやしてほしいと思います。それから将来は、タイムマシンなどでいろんなものを見たりできるように実現させたい。また、世界の人たちとひろくつきあったり、人類のことを考える人になってみたいと思う。

三宅博　〝受験地獄〟がなんとかならないかと思う。

大内　今の世界のように、タテ一列の社会でなく、ヨコ一列の社会になって、お金や身分のあるなしで差別されない社会になればいいと思う。

杉山　ヨコの関係をつくることを大切にしたいね。

小学生にひとこと

杉山　広い意味で、自分の好きなことをやっておけばいいんじゃないかと思う。

大内　六年生になると、私立中学校に入りたいと思って勉強する人もいるかもしれないけど、体力づくりのためにも、思いきり遊んでいたほうがいいと思う。

杉山　少なくとも小学校四年生のころは、塾などに行かず遊んだほうがいい。

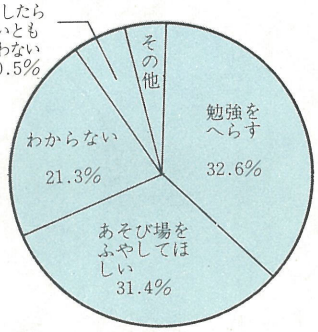
野村　小学校三～四年のころがいちばん思い出に残るころだから、勉強よりも集団で遊んでおいたほうがいいと思う。

三宅博　小学生のうちにいい友だちをつくっておいたほうがいい。中学になるとあそびが少なくなったりしたせいもあって、友だちはなかなかつくりにくいんだから。

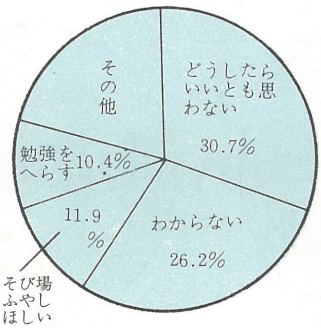
三宅真　私も〝あそび〟は大切だといってきたけど、でも、小学生のうちに基礎だけはしっかり勉強しておいてほしいと思う。

Q3　あそび時間が少なくなることに対して、あなたはどうしたいと思いますか。

小学校



中学校



「あそび」に対する考えかたが、ずいぶん違ってきていることが、わかります。

あそび・あそび場アンケートの集計をおえて

前号と本号で「あそび・あそび場アンケート」の結果のいくつかを紹介しました。これは、みなさんが、いつ、どこで、だれと、どのような遊びをしているか、また、どのようなことを望んでいるか、などをみなさんに質問をし、回答をしていただいたものです。

この調査とあわせて、小学生と中学生それぞれ八人ずつ集まっていただき座談会を開き、みなさんが日ごろ考えていることを聞いてみました。その内容は、すでにごらんのとおりです。では、ここで、全体をとおして、感じたことを書いてみましょう。

アンケート調査の中で、みなさんが自由に思うことを書いている内容を見ると、小学生男子では、「球場で野球をしたい」「いろんな動物に乗りたい」「道路でキャッチボールをしたい」「自転車に乗って走り回る」「野球の練習をしたい」など。女子では、「広い芝生のあるところで友だちと思いきり遊びたい」「美しい自然の中で昼寝をしたい「「広いところで遊びたい」などが多く、小学生では、自分と近いところで思いきって遊んだり、広場がほしいというのが多いようです。

中学生になると、広場で思いきり遊びたいというのもありますが、活動したいはんいがもっと広くなり、「日本一周をしたい」「外国旅行をしたい」などがでてきます。中には、おとなしかできないことをしたいというのがふえてきています。

小学校の女子は、男子とあまり違いませんが、中学生になると、女子では、「自然のある公園で友だちと遊びたい」というような自然へのあこがれが多くなるいっぽう、「パチンコがしたい」「ともだちと三宮で買物をしたい」「バイクに乗りたい」など、おとなや男子がよくするようなこともでてきます。しかし、男子と違って、ひとりで何かを自由にしたいという人が目立ってきています。

小学生の座談会の中で、「勉強も遊びもだいじですが、どちらかといえば、どちらがだいじだと思いますか」という質問に対し、八人のうち三人が「勉強がだいじ」と答え、三人が「遊びがだいじ」と考えています。「遊びがだいじ」の理由として、「いまのうちに遊んで、からだをきたえておかないと、おとなになると困る」「遊ぶことによって友だちができる」など、何か将来のためになるからというものが目立ちました。

以上のとおり、アンケートや座談会から考えますと、多くのみなさんは、心の中で、将来の自分のことを考えながら、いまの生活からぬけ出して、思いきりのびのびとすごしたい、何か冒険をしたい、変ったことをしたいと思っているようですね。

みなさんの声の中で、「自然の中で思いきり遊んでみたい」というのが多かったのですが、近くには、六甲の恵まれた自然があります。市内には、野外活動センターもあります。いつでも行ったり、毎日の遊び場とはなりませんが、いまからお父さん、お母さん、そして、友だちと計画をたて、実行してみませんか。

また、市内には、神社や、史跡、遺跡がたくさんあります。春休みにでも歩いて調べるのもおもしろいですね。

最近は、おもちゃや遊び道具などが、すぐに手にはいります。しかし、ほしいからといって、すぐ買わずに、自分の身の回りにあるものを利用して、いろいろ・・・・・ふうをし、自分で作ってみるのも楽しいことですね。

さて、現在、市内にある公園についてのみんなの不満は、「せまい」「小さい子どもがいて、思いきり遊べない」「ボール遊びができにくいようにつくられている」などが目立っています。

昔は、いまのように、きちっとした公園は、あまりありませんでした。道路やあき地がおもな遊び場でした。しかし、だんだん、家がたってきて空地が少なくなり、また、車がふえて、道路では、遊びにくくなりました。そこでみなさんから「車のとおらない道がほしい」「キャッチボールのできる広場がほしい」「自転車道路がほしい」という声が多くなってきています。

このようなことから、市役所では、歩道の一部を自転車専用道路にしたり、道路から車をしめ出して〝遊ぎ道路〟にしたり、あき地を利用して〝ちびっ子広場〟をつくったりし、すこしでも遊び場をふやすようにいろいろ努力をしています。

市の将来計画では、公園を市民ひとりあたり六平方（現在一・八平方）にふやし、また、〝線の公園〟＝緑道をつくっていくよう考えています。

いま、浜の埋立地ができあがりつつありますが、そこには、五万平方の公園をはじめ、大小さまざまな公園が十一か所でき、また、安全に散歩できる緑道もできます。さらに、沖の埋立地には、みんなが望んでいる総合スポーツセンターなどの施設ができる予定で、みんなの希望も夢ではありません。いまから「私はこんな公園や遊び場がほしい」「ぼくは、こんな広場がいいな」など、どんどん夢をえがいて、よいアイデアを出していこうではありませんか。みんなの声が住みよいまちにしていく大きな力となるのです。お互いにがんばりましょうね。

おかあさんの書いた童話②

まひるちゃんのあざ

文・藤野敏子

まひるちゃんは女の子です。おひるの十二時に生まれたので、おかあさんはこの赤んぼうに「まひる」という名前をつけたいと思いました。そこで、おとうさんにそのことをいいました。「うん！それもいいな。まひる…か。あひるじゃなく、まひるだな」とおとうさんはいって、こんどは少し大きな声で、「おい、赤んぼう、まひるという名でいいかい？」と赤んぼうのほうを見ました。そのときちょうど、赤んぼうは目をつむったままで、「オギャアー」となきました。おとうさんはよろこんで「よし」といって、名前をまひるにきめました。

まひるは、みんなのなかまになりました。でも、まひるはまだ小さいので、いつもねてばかりいました。だれかがのぞきにいってみると、じっとしていて目をつむったままでほやっとわらって、またねむってしまいます。

ミルクを少しずつのませてもらっているうちに、まひるのおかおもまるくなり目もあいて、なき声も大きくなりました。まひるの左の手くびのところに小さなあざがあるのをおかあさんが見つけたのは、ちょうどそのころのことでした。うすむらさきのあざは、あらってもとれませんでした。

まひるは二才になりました。まひるには二年生のおにいさんがいます。ふたりは、火のなかよしでした。おにいさんが、おともだちと山へかぶと虫をとりにいくときは、まひるはいっしょでついていくことしました。でもこの日はおにいさんが「まひる、おまえはきたらあかん！」といいます。まひるはとてもついていきたかったので「いく」といってききません。それでも、おかあさんがまひるをうしろからそっとだきあげ、せなかにおんぶすると、まひるはすぐにおにいさんたちのことなどわすれ、おかあさんのせなかにほっぺたをくっつけて、ねむってしまいました。

めがさめると、まひるはすぐに道へ出てあそびました。そしていつかにぎやかなおまつりの日のことをふっと思いました。まひるはみんなといっしょに町のまん中をあるいていて、いつのまにかおかあさんとはぐれてしまったときのことを思ったのでした。まひるはしらないうちに、しらない人のきもののそでをつかまえてあるいていたのです。そのときは、少しいってから気がついたので、うしろをむいておかあさんのそばへひきかえしたのでした。まひるはむねがドキドキしていましたが、そのときおかあさんが「まひるちゃん、もしもまいごになってもねぇ、なるべくじっとしているのよ。まひるちゃんのおててにはあざがあるから、すぐにたがせるんだからねぇ」といってくれたので、ずいぶん安心しました。でもこのあざのことなくれるはひとりであそんでいてもこの日はあまりさみしいとは思いませんでしたっけ。

そのつぎの日の夕がたのことでした。道で遊んでいたまひるは、ひとりでうら山のほうへ行き、こんぐりを三つひろってかえってきました。でも、このうら山のおくにはきつねがいて、ときどき人をだますことがありました。だから、夕ごはんのとき、山からかえってきたまひるがどういうわけかその日はごはんをこぼしたり、お茶をこぼしたりおはしをもったまま立ってあるきまわったり、うたをうたったり、おかあさんの注意をきかなかったりしたので、おかあさんはとても心配したのです。おかあさんは、おにいさんのほうをむいていいました。

「こんやのまひるは、わたしのいうことをきかないわね。さっきうら山のほうへだまってひとりでいってきたらしいから、この子は山のきつねかもしれないよ。いたずらきつねがまひるにばけてきているのとちがうかしら？。おにいちゃん、ちょっとこの子のうしろを見てごらんなさい。きつねのしっぽはぶらさがっていない？」おにいさんは、そおっとまひるのうしろにまわって、そしていいました。

「しっぽなんかないよ」でも、おかあさんはまた何かはっきりしない顔をして「でも、この子はほんとうのまひるかしら？」とつぶやきました。

そのとき、いえの中をあるきまわっていたまひるがピタリととまって、にっこり笑っておかあさんに左の手をさしだしました。

まひるはそして、大きな声でいいました。

「これ、わたしのあざ」

おかあさんは思わず笑いだして、「そうね」といってまひるの手にキスしてくれました。

藤野敏子さん

市内翠ケ丘町にお住まいの、童話の勉強をなさっているかたです。ひとつの童話を通じて、みなさんにやさしいこころをつたえたいと、書いてくださいました。